

## 悔しさを肝に銘じて

郷里の海辺、千本浜沿いの街道に寺があり、その脇に首塚がある。ここは北条軍と武田軍の古戦場であった。後年、埋もれていた遺骨が現れここに葬った。

子らの夏の風物詩。「肝試し」。町内の寺門に集り、1キロほど先の、この首塚に草野球のボールを置いてくる。次ぎの者が首塚に置かれたボールを持って帰る。

戸山流居合の達人、簗谷さん曾祖父の少年時は、ボールの代わりに獄門台の首を持ってくる肝試しをやったと云う。

明治政府が斬首刑を禁止しても、反政府の気風が強かった“反近代・伊達藩”は斬首にこだわったのだろう。

「肝」は焼鳥のレバーではない。内臓の総称。古の人はこれを「心」「精神」とした。心臓→心→ハートとしたのはきのうきょうの毛唐かぶれ。

お前は肝が据わってない。あいつは肝が太い。肝を潰つぶしたぜ。肝を冷せ。肝をつぶしたぜ。肝を焼くぜ。

当時の大人はよく云っていた。

「肝」が世相から消えはじめたのが「肝っ玉かあさん」が終わったころであらうか。そしたらブラウン管に小野田少尉が映った。

えも云われぬほど肝に染しみる姿であった。

母国以上にかつての勝戦国が絶賛した。そのお蔭で、負けても勇姿は残せると肝に銘ずる。

ローマ法王が死んだ弟を背中に背負い、焼き場で順番を待ち続ける少年の写真を配った。「戦争が生み出したもの」を裏面に記して。

ローマ法王にはわからぬが、吾らにはわかる。肝に染しみる姿は悔しさを秘めていたからだ。小野田少尉の勇姿と同じ。

もう、七十余年たつ。悔しさを肝に銘じておる戦前・戦中派。そして敗戦少年派は何人、生き延びているだろうか。